

10.12. 7

特243

948

祥一著

人生

は

戦場

なり

眞剣

腹で勝て

定價十錢



始



はしがき

ある友人が私の生活振りを見て君の生活の中にはナニかありさうな氣持がする。短いもので
もよいから、折があつたら、ナニか書いて見ないかと言つてシキリにすすめて呉れる。しかし
私の生活の中に、友人がいふやうに、殊更人と違つた珍しいものがありさうにも思へない。誰
でも皆私と同じやうに、この人生を一ツの戦場と心得、生活に對してマジメに考へてゐる人
なら、誰だつてそれ相當な處世上の方針を持つてゐる筈である。

さういふ意味においてなら、私にもそれ相當の體驗と方針がある。ではそのままをマトメて
見ようといつて書いたのが取りも直さず、この小冊子である。書名もドウつけてよいかわから
ないから一切出版者の手にまかせることとした。

シカシ考へて見るのに、誰でも何等かの意味において、生活苦に惱み抜いてゐるのである。
ヨシ生活苦にナヤムやうなことがなくても、將來に對して、多少の不安を感じてゐない人はな
いだらう。人生は嚴肅なる事實であるとともに、現在のままが續くものでも決してない。



何等かの變化が起つて、あるひは幸運の人が不運のドン底へ、あるひは不運のドン底からニコニコと幸福の嶺へ、よち登つて來ないとも限らない。ソコが人生の妙味と言へば言へる。この妙味を解しない人はホントウに人生が判つたとはいへない。

何ものとも知れない底深い人生は、大きな強い力をもつて、グン／＼と小さな弱い人間を引きずつて行く。して見れば、人間はココに大きな力を持たねばならないことになる。大きな力とは何か、權力か、財産か、知識か。イヤ私は腹であると答へる。

人間はシツカリと腹をキメテかからぬと、金があつても、頭がすぐれてゐてもこの人生の戦場から、見るもムザンに敗退せねばならぬときが來るだらう。

此の小冊子が少しでも諸君の参考になれば、私のよろこびとするところである。

雜 司 ヶ 谷 の 寓 居 に て

著 者

(2)

一 次 目 一

一	腹のサグリ合ひ……………	六
二	腹は借りものでは間に合はない……………	七
三	哲學水車屋の話……………	八
四	誤つた研究方法の實生活に及ぼす害……………	一〇
五	自分で自分の腹を作る……………	一一
六	自分の腹は自分一人のもの……………	一二
七	後腹を更に練れ……………	一四
八	腹は先づ夫婦の合作から……………	一七
九	腹か出來てゐない證據……………	一八
一〇	腹とは今日の事だけで明日を案じないこと……………	一九
一一	夫婦といふ二つの腹が一つにキマル……………	二一
一二	生活不安を解消して生活苦と闘ふ……………	二三
一三	夫婦の腹がキマレば貧乏がケシ飛ぶ……………	二三
一四	定收のない我が家のフシギな生活力……………	二五
一五	十四キロの米を十六キロに食ふ……………	二六
一六	腹がダメつてモノをいふ……………	二七

(3)

一次 目一

一七	腹が人間を肥すのである………	元
一八	腹が五圓づつ生み出した話………	元
一九	腹を作るには先づ見榮を捨てろ………	三
二〇	生活の苦樂のカギは自分の腹にある………	三
二一	明日の不安を除くのが腹のヤクメ………	三
二二	腹を作る目標を一日に置け………	三
二三	將來を見透して實際生活は一日づつ區ギル………	三
二四	大切なのは一日々々を眞面目に暮すこと………	七
二五	腹は無限の富を生み出す………	六
二六	月給取りの腹の多くはスキハラ………	六
二七	腹の据つた生活は行き詰るときがない………	元
二八	腹は先づ無一物から………	四〇
二九	カネが欲しかつたらマツ働いて見せる………	四三
三〇	コウして腹を作るべきだ………	四四
三一	ドシ／＼生活を切り下げる度胸が大切………	四五
三二	眞剣に生きる………	四六

奥平祥一著

人生叢書 (2)

人生は戦場なり

—眞剣に生きる—

一 腹のサグリ合ひ

腹を作れ！

昔の人は、さすがにうまいことをいつたものである。腹一つつくれば、このシヤバの憂き世をへッ茶で暮せるといふのだから、これ以上、手ツ取り早い世渡りの道はない。そこで誰でも一度はこの腹をつくりたがる。商人は商人のハラを、勤め人は勤め人のハラを、百姓は百姓のハラを、軍人は軍人のハラを、政治家は政治家のハラを。

ところが、この腹といふ奴はさうやすくとつくれるものではない。そこで世間といふハラのサグリ合ひといふ事が始まる。ちやうど専賣特許と同じ様なものだ。専賣特許が取ればミゴトに一儲け出来る。どこそこの誰々は専賣特許で一儲けした。ヨシそれならこのオレもといふので専賣特許の發明にとりかかるとりかかつて見たもの、さうやすくと天下の發明ができるものではない。いろく工夫してやつて見た。ドウモうまくゆかない。そこで結局、悪心しんを起して他人の發明をヌスムといふやうなことになる。ハラのサグリ合ひも、それと同じこ

(6)

とだ、どこそこの誰々は、ナカく腹ができてゐるといふ噂が立つと、ヌレ手で粟の亡者どもがわれ先きに 駆けつける。キヤツはドウして腹をこしらへたのだらう。秘傳ひでんでもあれば一つヌスンで来てやらう、皆さういふマチガツク腹である。専賣特許なら、萬一ヌスンでも使ひようによつては一ト儲けできようか知らないが、この腹のみは、かりに他人様のヌスミ得たところところで、使ひみちがない。そこにハラのハラたる所以があるといふことを先づ知つておかなければならない

二 腹は借りものでは間に合はない

腹ばつかりはドンナに立派な腹でも、他人のでは決して間に合ふものではない。こればかりはぞがヒでもメイく自分の腹をこしらへてかからなければいけない。腹をつくる秘訣の第一はココにある。

自分の腹——それだ。まづ腹をつくらうとする者は、借りものの他人の腹で間に合はせてお

(7)

かうなどといふ亡者根性を根コソギ打つちやつてしまはなければいけない。この亡者根性が、つきまとつてゐるうちは、一生かかつて人間は出来ツコはない。その證據には見給へ。ハラが出来た人間から見ると、ハラが出来てゐない世間の亡者どもは、みんな、この借りものの他人のハラで間に合はせておかうといふ、シミツタれた考へのフラ／＼幽霊みたやうなものだ。幽霊といへば昔から足のないものとキマツてゐるけれど、實は幽霊にはハラがないのだ、手や足の一本ぐらゐ、いやマカリ間ちがつて両手足ともなくなつても、人間は生きてゐられるけれど、ハラのマシ中から輪切りにされた人間が、生きてゐたためしが昔からあるだらうか、それ程、腹といふところは大切なところなのだ。

(8)

三 哲學水車屋の話

こんな話がある。

あるところに哲學水車屋といふ實に尊敬すべきアダナを奉られてゐるほど、物知りで有名な

水車小屋の番人があつた。あるときどうしたはづみか水車に故障が起つて運転ができなくなつてしまつた。そこで哲學水車屋は、もちまへの博學振りを發揮して、このときぞとばかり、水車機械の研究にとりかかつた。彼は、まづ穀物を入れるべき臼を研究して見た。次ぎに杵の研究に取りかかつた。ところがその二つの研究では満足な結論を擱めなかつたので、今度はその杵を上下に動かす齒車の研究に移つた。そしてベルトの研究、水車の研究と、つぎ／＼に研究をつづけた結果、つひに賢明なる哲學水車屋は、水車小屋の機械全體を動かしてゐるものは、水車ではないことを發見した。では、彼は最後に何を研究し、何を發見したのでらうか。彼が遂に發見したものは、臼でもなく、杵でもなく、齒車でもなく、ベルトでもなく、水車でもなく、その水車を動かしてゐる源の水流であるといふことに氣が付いた。

哲學水車屋は、ひとり手を拍つて自分の大發見を、ほめたたへて言つた。

「さうだ、水車小屋そのものを動かしてゐるものは、他ならぬこの水流それ自身なのである。そこで水車小屋全體を具合よく運轉するには、この水流を先づ研究しなければならぬ。」

(9)

賢明にして研究心に富む哲學水車屋は、偉大な発見でもしたつもりで、いろく水流の研究に取りかかることとなつた。

四 誤つた研究方法の實生活に及ぼす害

さてその結果、哲學水車屋が得た結論はなんだつたらうか、彼は水流を研究してゐる間に、ユクリなくも第二の疑問に行きあたつてしまつた。それは何かといふと、水流を水流として流してゐるものが、水流の他になければならないといふマコトに哲學者らしい疑問であつた。そして、彼は頭をヒネツて考へたアゲク、それは水流をサへギル兩方の堰にあるといふ一大事實を發見した。そこで彼は寢食をわすれて、第二の問題の研究に移つた。しかし疑問は間もなく解けた。それは堰を支へてゐるものは他ならぬ大地であるといふ結論を得た。そこで彼は第三段の研究として大地そのものの研究に没頭した。

彼の研究範囲は、ますく廣大となり、それとともに彼の研究は、次第に最初の目的から遠

(10)

ざかりつつあることを、不幸な水車小屋の番人は覺らなかつた。おそらく彼がかうした研究態度をアラクメない限り、彼の水車は、永久に運轉する日を見ないだらう。従つて彼自身、いつか衣食の途を失ふとともに、悲惨な餓死にをしないとも限らない。一體この誤りは、どこから來てゐるのであらうか。

五 自分で自分の腹を作る

要するに、この哲學水車屋もまた、一個の幽靈にすぎないといふことがいへる。彼の研究方法は、研究方法としては、決してマチガツてはゐない。しかし彼は不幸その研究の目的を、最初の出發點から誤つてゐたのだ。彼は、まづ粉を製するには、ドウしたら一番便利に廉く敏速に製造することが出来るかといふ、最も大切な目的をきめてかからなければならなかつたのである。そのために、臼は、杵は、齒車は、ベルトは、水車は、水流はといふ風に、彼の熱心な研究をすすめて行つたなら、こんなマチガヒはシデカサズにすんだであらう。そこで腹を作る

(11)

にしても、これと同じで、まづ腹を作らうとする者は、自分で自分の腹を作るのだといふことを、決して忘れてはならない。他人の腹ではない、あく迄も自分の腹である。瘦せてゐたにしろ、肥つてゐたにしろ、この腹は他人の腹とカケガヒのできない大切な腹だといふことを、イツデモ忘れてはいけない。他人の腹と比較するなどといふことは、バカの骨頂だ。ヤセても枯れても、これはオレの腹だぞとばかり、自分の腹に對する自信を養はなければイケない。

しかし、まだそんなことを言つてゐる間は、頭のドコかで他人の腹と比較してゐる證據だから、まだいけない。そんな乞食根性は一刻も早く、キレイさつぱりと捨ててわが腹尊しといふ境地に出て來なければダメだ。

六 自分の腹は自分一人のもの

自分の腹は、決して他人からの借りものではない。オギヤアと生れたときから、チャンと自分の腹として、自分の身體に納まつてゐる。そこがハラの有りがたいところで、その有りがた

ささへ悟れば至極カンタンに人間の腹は据るものである。ところが、世間の亡者どもは、朝から晩まで、自分の腹のアリカを大騒ぎして探しまはつてゐる。そんなバカ／＼しい話があつてたまつたものではない。腹は寝ても覺めても、さかさにならうと、横にならうと、イツデモ自分の身體についてまはつてゐる。この腹から離れるときは、いふまでもなく、人間死ぬときだ。いひかへるならば、人間は死ぬときが來なければ決して死なないといふことだ。腹といふものはそれほど人間から離れようとしても、離れられない運命を背負つてゐるものだ。また人間の側から言つても、ハラに御用がなくなるときまで、切つて捨てたいとおもつても、振りもぎつてしまひたいとおもつても、腹と離れることはできない運命のもとに置かれてゐるのだ。昔のサムライは、このシヤバに用事がなくなるとサツサと腹を切つて死んでしまつたものだ。生きてゐればこそハラにも用事がある、生きてゐる必要を感じなくなつたものに、なんでこんなダンブクロをブラ下げてゐる必要があらう。いひかへるならば、腹といふものは、人間が生きてゐる限り決して人間から離れないといふことだ。

このカンタンな一事を知つただけでも、妙にハラがドツシリと据つて来るものだ。ウソだとおもふなら寝る前の五分間でもよい、自分のハラを撫でながら、ジツと考へて見るがよい。それさへ面倒だといふなら電車の釣革にブラ下つてゐてもよいジツと考へて見たまへ。さうして、「さうだ！」と腹のドン底から悟りがコミ上げて來たらそのときこそシメタものである。もう腹は出來たも同じことだ。

矢が來ようと、鐵砲玉が來ようとビクともするものではない。食ふ心配などタチドコロにドコかへ吹つ飛んで行つてしまふ。それはさうだらう。禪などでイヤにやかましくいふ「生死の一大事因縁」を、そのセツナにズバリと斷ち切つてしまつたからだ。ツマリ生きてゐることも死ぬことも、恐ろしいとおもはなくなるからだ。ハラが出來たとは他でもないそのことをいふのだ。悟つて見れば實にカンタンなことではないか。

七 後腹を更に練れ

では、さうと悟つた。それでよいかとなると、イヤさうカンタンには問屋の方へ卸してはくれない。世の中といふものは、事ほど左様にカンタンには出來てゐない。なぜかならば、人間は一旦悟つたからといつて、そのままポツクリ死んでしまふものではないからである。そのまま死んでしまふのなら、このくらゐ世話の焼けない話はないのだが、厄介なことに人間は死ぬまでの間はどうしても生きてゐなければならぬ。そこで問題が再び複雑となる。

ある日のこと、私のところへ、一人の失業者が相談にやつて來た。私も永いこと失業した経験があるので失業した人の氣持は手に取るやうにわかる。失業した、就職運動をした職がナカナカ見つからない。そんなことをしてゐるうちに、やめるとき貰つた少しばかりの手當はだんだんなくなつて行く、家賃が滞る、家主から追ひ立てられる、米が無くなる、夫婦仲がダンダシ悪くなる、ヤケが起る、神経衰弱が始まる、大體申し合せたやうにさういつた順序である。その男もヤツパリさうだつた。私は顔を見ただけで「ハハアとう／＼ココまで來てしまつたな」と直感した。そこで私が

「このごろ夫婦仲はドウだね」
と、ちよつとカマをかける

「あんまりよくもない。」
と、答へる。そこで私が

「あんまりでもなささうだね。ホントウのことを言へよ」
といふと、その友人は苦笑しながら

「實は、今朝も一ト論判やつて来たところだ」
と、とう／＼本音を吐いてしまった。

「そうれ見たまへ。僕のいふことはあたるだらうが、それで家にゐても面白くないから、僕のところへやつて来たのだらう。」

「君は、まるで占者のやうなことをいふネ、その通りだ」

「僕にも経騒があるから當るのだよ、——しかし、そこまで行つてしまつたのでは、君もい

よく／＼行きつまりだね。」

「實は——」

友人は、頭を掻きながら、いひにくさうにしてゐたが、

「君の占ひは當るよ、實は家主から追ひ立てを食つてゐるところだ。」

私がおもつてゐる通りのことを告白するのだつた。

八 腹は先づ夫婦の合作から

そこで、私がいふには、

「では一つ秘訣を教へてやらう。まづ夫婦仲をよくしたまへ、家主から追ひ立てを食ふのも職が見つからないのも、みんな夫婦仲がウマク行つてゐないからだ。そんなことをしてゐると今度は病氣といふ災難が振りかかつて来るぞ。用心々々。」

「それは一體どういふことなんだね。」

そこで、私は諄々として説いていつた。

私にも失業の體驗は再々あるが、なぜ失業することが苦痛であるかと考へて見るのに、その第一は、もちろん生活の不安といふこと、家賃が拂へない、米が買へない、電燈・ガスを止められる。さういふ苦痛が失業といふものに伴つて襲つて来る。私も始めのうちは失業苦といへば、さういふものとはばかり、キメテかかつてゐた。しかし事實は、さうした物質的な苦痛は、先刻一つの例として引いた、あの哲學水車屋が知らず／＼冒してゐた「目的を離れた研究」——つまり根本に觸れてゐない枝葉末節の問題だといふことに氣が付いた。

(18)

九 腹が出来てゐない證據

私達は、一ト口に不安のない生活を送りたいといふ。ソレを先づ考へて見る必要がある。
不安がないといふことはどういふことか。
不安とは生活苦のことだらうか。

生活苦とはドウいふことだらうか。

食へないといふこと、つまり家賃が拂へない。米代が拂へない。電燈代、ガス代が拂へない。どうして拂はうかといふ心配。

さうすると生活不安といふことは、いひかへるならば、明日の生活に對する取越苦勞、心配といふことになる。

ところが、かうして先へ／＼と心配して行つたなら、遂に際限がないことになつてしまふ。つまり、哲學水車屋が、研究の範圍を先へ／＼と延ばして行つた結果、とう／＼餓ゑ死にもしかねまじき悲惨な境遇におちいつてしまつたのと同じことである。

(19)

一〇 腹とは今日の事だけで明日を案じないこと

そこで、始めて自分のこの腹が必要になつて来る。際限のない心配を今日だけで一旦打ち切つてしまふところに始めて腹の値打が出て来る。家主のヤツメ、今日は來はしまいか、明日來

はしまいかといふ心配を、來たら來たときのことと一旦打ち切る。そこで始めて腹がモノをいふことになる。もしそのとき拂へれば幸ひ、拂へなかつたら誠意をこめて拂へるときまで待つてもらふ。待つてくれないときには、家族ヒツクルメて出て行く。さういふ腹が据つて來る。ところが、折角自分の腹は据つても、このとき若し大事な細君の腹がグラツイてゐたのでは、この戦争には悲しいかなコチラの負けといふことになる。

「さういつたつて、アナタ、この家を出たら明日からドウなりますか。」
「どうにかなる。」

「ドウにかなると、おつしやつたつて、私、心配で心配で。」

「また泣き言か、それでは、お前はお前のよいやうに、どうにでも勝手にせい。」

「ぢや、私、子供たちを連れて一時實家へ歸つてますわ。」

これでは、戦争に勝てべき道理がない、家主から追ひ出されるにきまつてゐる。米屋は米を持つて來なくなるにきまつてゐる。電燈は切られる、ガスは止められる、生活は忽ち破壊され

て、一家もろともその日から路頭に迷ふことは、火を踏るよりもあきらかなことだ。

一一 夫婦といふ二つの腹が一つにキマル

ではその反對の場合を考へて見よう。

夫「明日はいよ／＼家主が最後の談判に來るぞ。」

妻「よろしうございますとも、來たら、もう一度、誠意をこめて頼んで見ませう。」

夫「頼んでも聞いてくれないときはドウする」

妻「そのときは仕方がございませんわ。どこへでも出て行けばよいのですわ。」

夫「さうか、お前がサウいふ氣持なら、オレも大いに氣を強うするに足りる。一ツその手でやつて見よう」

そこで明日になると、いよ／＼家主がヤツて來る。夫婦して手を突いて頼む。しかし夫婦の間では、既に固い決心（腹）が出來てゐるから、ドツチにコロンでも、この戦争は家主のマケ

だ。萬一、幸ひにコチラの頼みを聞いてくれるなら申し分なし、最悪の場合を考へて見たところでコチラは既に出て行かうと決心してゐるのだから、少しもマゴツカない。延いて路頭に迷ふやうなことは絶対にない。

一二 生活不安を解消して生活苦と闘ふ

夫婦の腹が、かういふ具合にピツタリ一致出来るなら、たとひ家を追ひ立てられようと、明日食ふ米が缺乏しよう、電燈を消されようと、ガスを止められようと、苦痛は苦痛だけれども、不安といふものはない。いや不安どころか、かへつて生活に今まで感じたことのない眞剣味が感じられて、

何くそツ……………

といふ勇氣がフシギと腹のドン底から湧いて來るものである。すると、

生活不安といふことと、生活に對する苦痛といふものとは、まったく別個のものであつたと

いふことに氣が付くだらう。

このカンタンな眞理に、夫婦のどつちかが先きに氣が付けばシメタものだ。たちどころに、生活不安は解消して今まで経験したことのない、希望に満ち／＼た明るい生活が、いとなめるやうになる。さういふ家庭空氣の中から、就職運動に出かけ、商賣に出かけるのだから、まづ行く道理があらうわけではない。自分でさへフシギに思ふくらゐ、トン／＼拍子に事は運んで行く。これが腹の出來たナニよりの證據である。

一三 夫婦の腹がキマレば貧乏がケン飛ぶ

さうすると、腹こいふものは、自分だけが出來たのでは、まだホントウの役には立たないものといふことがわかる。

夫の腹が出來たなら、その次ぎには、早速細君の腹ごしらへにかからなければいけない。夫婦の腹ごしらへさへ出來上れば、子供たちの腹はダマツてゐても、自然と出來上るものだ。一

家一族の腹が出来上れば、もう恐いものはない。このくらゐ強いものは世の中にはない。

サアどうだ、どうだと私が詰め寄ると、

私の友人は頭を掻きながら、

「君がいふ通りだ。何より先きに自分の腹をこしらへてかからなければダメだ。」
といつた。そこで私が、

「ぢや一ツ僕の體驗を話さう。つまり僕の家では十四キロの米を、いつも十六キロにして食つてゐるといふ話だ。」

といふと、友人は本氣になつて聞いてくれない。

「まるでオトギバナシのやうな話だネ。」

と言つてニヤ／＼笑つてゐる。

「イヤ、オトギバナシではない。ほんとうに、この僕の家で體驗してゐる話だ。バカにしな
いでマア聞きたまへ。」

と言つて、私は次ぎのやうな體驗談を試みた。

一四 定收のない我が家のフシギな生活力

私の家では、必要上から米はイツデモ現金買ひにしてゐる。現金買ひといふものはムダが出ないものだが、それだけ金の餘裕のない人間にとつては不自由の上もないものだ。殊に私は永い間、定收を持たないので現金がイツ入つて来るのか手に入つて見てでない、まつたく豫定のつかないことが度々ある。そこで、私はかね／＼女房には米が無くなる二日前にかならず私に申し出るやうにと言ひつけておく。でないとなつてからでは間に合はないことが、シバ／＼あるからだ。ところが、その二日前に、あらかじめ注意されてゐても、間に合ひかねることがしば／＼ある。一番困るのはさういふときだ。たとひ明後日、金が入る豫定があつてもその金が入るまでの二日間が非常に困る。さういふとき、私たちの家族の間には、申し合せたやうに、誰がいひ出すともなくフシギな力が働き出すのだ。つまり誰が殖やすともなく、十四

キロの米が十六キロに殖えるのだ。

一五 十四キロの米を十六キロに食ふ

さういふと、マルで子供ダマシのやうにおもふ人があるだらうけれど、決して子供ダマシでもなんでもない。かくごとく事實なのである。

では、何かトリツクを用ひるのだらうといふかも知れないけれど、トリツクも何も用ひない。では、家族のうち誰か一人くらの遠慮して食はない者があるのだらう、といふかも知れないけれど、さうでもない。

お粥にもしない、芋も入れて炊かない。それでゐてフシギと十四キロの米が十六キロに殖えるのだ

しかし、だからといつて、十四キロは天下ドコへ行つても十四キロで、十六キロであるべき筈はない。私のところの十四キロも、やはり十四キロに相違ない。たゞ、その十四キロの米

を食べる食べ方が違ふだけである。

一六 腹がダマつてモノをいふ

夫婦・親子の仲が完全に解け合つてゐれば、したがつて不平不満不足がないといふことは、心のドコカに、アアありがたいといふ感謝 氣持が動いてゐる證據である。感謝 氣持は、知らずくの間、何事につけても自分の身勝手を引つ込めて、他人を先きに立てて行く。三度三度の食事をするときでも、夫は妻に對して、

「お前から先きに。」

といふ、あたたかな氣持が動く。

また、妻は夫に對して、

「どうぞ、あなたからお先きに。」

といふ謙遜の氣持か、自然と湧く。親は子に、子は親に、——自然一家族自分を後にして、

他の者を先きにしようといふ推し譲る氣持が、誰いふとなく、お互ひの間に、自然に動いて來る。フシギなもので、この氣持だけで、十四キロの米が十六キロとなる。誰も絶食のウキ目を見ないで、二日間のアナが塞がつて行く。十四キロの米を十六キロにして食ふ秘訣は、これ以上にあるべき筈はない。ただ夫婦解け合ひ、親子解け合つた仲においてのみ、十四キロの米は十六キロの米になり得る可能性があり得るのである。それでもなほ納得の行かない人は、この反對の場合を考へて見れば、スグにわかることだ。金があり餘つて、なほ不平不満不足の絶えない人は、あれはドウしたといふことだ。この人たちは、十六キロの米を十四キロに減らして食つてゐる、ほんとうの意味における徒食遊民の種類に數へらるべき人々である。

(28)

一七 腹が人間を肥すのである

私の話を、ジツと聞いてゐた友人は、話が終ると同時に、

「それで委細了解が付いた。しかし、ここに心配なのは、そんなことを常に繰り返さへしてゐた

なら、遂に栄養不良におちいつてしまふことはないか。」

と、たづねるのであつた。そこで、私が答へていふには、

「そんなら少しも心配の必要はない。現に僕を見たまへ。かういふ生活を始めて以來、かれこれ十年になるが、依然として十六貫五百匁を下つたことはない。女房も子供も至極丈夫で、醫者の世話になつたことはない。」

「なるほど、さういへばさうだな。生きてる證據を見た以上、既に疑ふ餘地はない。よし！」

僕も始めて見よう。」

と、いつて元氣よく歸つて行つた。

(29)

一八 腹が五圓づつ生み出した話

これから以下は、その友人の生活報告になるのだが、その後二ヶ月ばかり経つたある日のこと、例の友人がヤツて來た。そして次ぎのやうな話をするのであつた。

私の友人は、私から話を聞かされた當座は、私の話は、イカにもリクツに合つてゐるやうだが、ドウも心から承服が出来かねたさうである。ところが次第に生活が逼迫して来て、近ごろでは毎日五十錢づつ持つて、米を買ひに行かねばならぬやうな、食ふか食はれるかの死線にまで追ひ詰められてしまった。ところが友人は、ココに一つのフシギな真理——生活の道——を發見したといふのである。それには、さすがの私も氣が付かないでゐたことである。

といふのは、友人の家族は、目下親子六人（子供はまだ小さい）だが、五十錢銀貨一枚持つて米を買つて来ると、ちやうど一日食べるだけの分量があるのださうだ。スルト一ヶ月の米代は三十日として十五圓あれば足りるわけだ。ところが俸給生活者時代には、月々ドウしても、二十圓は米屋へ支拂つてゐたといふのである。すると、フシギなことにココに明らかに五圓の差が出て來ることになる。わからないのは、この五圓だ。どういふわけでこの五圓の差が出て來るのだらうか。

友人は、いぶかしげに頭をひねるのだつた。

(30)

一九 腹を作るには先づ見榮を捨てる

なるほど、フシギなことがあるものではないか。私もフシギな氣がした。まさか俸給生活者時代に、細君が殊更米をソマツに扱つてゐたとも考へられない。さりとて今更、急に家族の食を減らしたとも考へられない。しかし、事實はタシカに五圓だけ餘裕が浮いてゐるのである。

ソコで友人がいふのは、

「いつか君の話聞いたとき、どう考へたつて十四キロの米が十六キロに殖えるなんて、バカな話があるべき筈はない。あれは一つのたとへばなしだらうと思つてゐたのだが、しかし事實自分が試みて見ると、ココに五圓の餘裕が出て來る。生活といふものは妙なものだといふことが、初めてわかつたヨ」

といふのだつた。

「それはよいところへ氣が付いた。ツマリは君と細君に腹ができた證據なんだ。五十錢玉一つ

(31)

持つて毎日米買ひに行く、考へて見れば、このくらゐミジメなミットモないことはないに相違ないけれど、君は止むを得ない生活の必要上から、その見榮をぬぎすて、それだけ生活に眞剣になり得たのだ。見榮があるうちは、まだまだ人間の腹は据らぬものだ。その見榮がなくなつてから、初めて人間の腹といふものは出来てくるものだ。」

と、私は断言した。

二〇 生活の苦樂のカギは自分の腹にある

(32)

自分の生活體驗ほど尊いものはない。ところが、多くの人は大抵それを見逃してしまつてゐる。自分が多くの實を現に抱いてゐるくせに、實は無いか實は無いかといつて、轉の目鷹の目で他人のフトコロばかりをネラツて歩いてゐる。その間に、自分が抱いてゐる實まで、人にサラはれてしまつて、シマツタ!! と氣が付いたときには、もう遅い。「持てる一ツのものをも奪はる」とはこのことだ。

生活を解決する鍵は、みんなメイノゝが一ツづつチャンと持ち合せてゐる筈だ。それなのに他人の合鍵で間に合せようなんてサモシイ亡者根性を出すから、かへつて生活が行き詰つてしまふのだ。友人にその例を取らう。

二一 明日の不安を除くのが腹のヤクメ

現に失業苦に悩んでゐる友人の悩みの根本原因は、「今日食ふ」ことではなくて「明日イカにして食はうか」「明後日イカにして食はうか」といふ、明日に對する不安なのである。ところが事實は、チャンとその不安は、友人自身、自分で解決を付けてゐるではないか。

その事實を友人は悟らないのだ。

友人は、たつた今、私の前で、毎日五十錢玉一つ持つて歸りさへすれば、トニカク一日食ふだけは食へるといつたではないか、そこに解決の鍵が秘められてゐることに、友人は氣が付かなかつたのだ。

(33)

それはドウいふことかといふと、人間の生活といふものは、一瞬間々々、いひかへると、一日々々が連続して一週間となり、一ヶ月となり、一年となり、十年となり、百年となるといふ簡単な事實を忘れてゐるからだ。百年といへば、このくらゐ長いものはない。ところが、これを逆考へて、一年といへば十年の十分の一、更に一年を十二ヶ月に區ギリ、十二ヶ月を一月づつに區ギリ、更に一ヶ月を三十日に區ギリ、三十日を一日づつに區ギリば、結局、人間の生活といふものは一日といふことになる。

私たちは、まづこの一日に生活の目標を置かなければいけない。

二二 腹を作る目標を一日に置き

これを生活費に當てはめて考へて見よう。一日の米代五十錢とすると一ヶ月三十日として十五圓、一年十二ヶ月として百八十圓、十年なら千八百圓、百年ならば一萬八千圓、一日五十錢もバカにならないものだ。そこで私たちの生活不安といふものが、ドコにあるかと考へて見る

と、つまり、私たちの生活の目標を最低の五十錢に置くか、十五圓におくか、百八十圓、千八百圓またはそれ以上の數字に置くかによつて、不安の程度がキマルのだ。

一ト月百八十圓の生活費を、一時に稼い蓄めておかなければならないといふ掟を立てるとなると、自然イツも自分のフトコロの中に百八十圓だけの貯蓄がないと不安になる。

一ト月千八百圓とすると、それだけないと一層不安はつゝのる。一萬八千圓となれば、それだけ生活へ安は更に増大する。

ところが、これを逆に考へて、千圓を百圓に切り下げ、百圓を十圓に切り下げ、十圓を一圓に切り下げるとか、または一ヶ月間の生活費の心配を、日間の生活費の檢出に切り下げると、それだけ生活不安は低くなつて行く筈ではないか。私が生活の目標を、一日限りに置けといふのはそこるところだ。

二三 將來を見透して實際生活は一日づつ區ギル

そこで、私が友人に向つていふには、

「一ヶ月の生活費をイクラ〜と初めからキメてかかるからこそ、不安でたまらないのだ。ところが、それとは反対に、自分の生活目標を一日一日と區ギツてやつて行けば、自然に不安は取り除かれる。たとへば君の家の生活費を假りに五十圓としようか。ところで、この五十圓を毎月キマツて何かで得ようとする不安が付きまよふ。ところが、これを十分の一の五圓づつ繰ぎ出すとして見たまへ、苦勞は従つて十分の一の五圓に減するわけではないか。又もし不幸にして、今月は五十圓繰ぎ出せなかつたとする。さうしたらその不足額だけ來月に繰り越して平均をとれば、それでよいではないか。つまりは、この五十圓に固く執着するからこそ、生活不安といふものが起つて來るのだ。常に目を長い將來に見透しをつけ、その半面實行して行く生活の目標を、その日〜の足許手許に置けば、自然と生活不安といふものはなくなるものなのである。」

と説明した。

二四 大切なのは一日々々を眞面目に暮すこと

たとひ一日百石の清水が湧き出す泉でも、百石一時に湧き出すものではない。一時間四石強一分間六舛強の清水が湧き出せばこそ、自然と一日百石の水量が湧き出すこととなるのだ。

最もよい泉とは二六時中絶えずよき清水がコン〜と湧き出して絶えない泉を指していふのと同じやうに、人間の生活といふものも、一時に巨萬の富を造ることよりも、いかにその人間が一年三百六十五日の一日々々を眞面目に暮してをるかといふことにある。

生活もそのやうに、一日の生活に對するハラさへ握りさへすれば、三百六十五日が、三千六百五十日であらうと、三萬六千五百日であらうと、生活に對するハラの握り方に變るべき筈はない。まづこの一日に對する腹をシツカリと握えてかからなければ、生活不安といふものは、永久に取り除かれるものでない。

二五 腹は無限の富を生み出す

腹を据ゑるといふことは、いひかへるならば、自分が無限の富を生み出す本家本元だといふサトリを開くことだ。私はよくそのたとへとして火をつかふ。火といふものは、燈火にしても炭火にしても、火自身に燃える力が宿つてをるからこそ燃えるのであつて、この力は外から加へられたものでも、あとから注ぎこんだものでもない。火自身さういふ力を自然と持つてゐるからだ。人間もその通りで、人間が生きて行く力といふものは、これは誰から付け加へられたものでも注ぎこまれたものでもない。人間自身オギヤアと生れたとき、イヤ母親の胎内にあつたときから、自然と備はつてゐる力だ。この自然に備はつた力があればこそ、人間は無限の富を生み出して、よりよい生活をいとむことが出来るのだ。

(28)

二六 月給取りの腹の多くはスキハラ

私も永い間、俵給生活をいとなんだ経験があるのだが、その頃はイクラ月給が殖えても不平不満だらけであつた。イツ鹹になるかわからないので、イクラ月給を貰つても生活が不安でたまらなかつた。

それはドウいふことかと今になつて考へて見ると、私自身に、無限の財を生み出す力があるといふタツタそれだけの事實を自覺してゐなかつたからだ。

月給を貰はなくなると、私はその日から食ふに困る。それでイヤ／＼ながらも、月給を貰つてゐる手前、眞面目に勤めてゐるやうな風を粧はなければならぬ。いつクビになるかも知れないといふ不安を抱いてゐながら、上役にベコ／＼頭を下げる。下げてゐるやうに見えて、その實、カゲでは赤い舌をペロリと出してゐる。そんなことで出世が出来る筈はない。私は美事にクビになつてしまつた。

(39)

二七 腹の据つた生活は行き詰るときがない

私は、私自身に無限の財を生み出す力があるといふことを自覚しない以前は、かういふ亡者のやうな生活を、いとなんてゐたのである。かういふ生活が行きつまるのは誰の罪でもない。嘗て、私自身の無自覚の罪だつたのだ。

二宮尊徳の如きは、つまり、さういふ考へで生活をやつてゐると、誰の生活でもキツトいつか行き詰るときが来るのだぞ、行きつまりが来ない前に一日も早く自分自身の腹を据ゑてかかれよと教へてゐるのだ。腹さへシツカリ据つてゐるなら、職業に高下はない。俸給生活をしようが、私のやうに定收の無い生活をいとなまうが、どつちにしても同じことだ。

俸給生活者——月給取りがクビになるのを、イノチでも取られるかのやうにビク／＼するのは、月給を貰はなくなると、その日から食つて行けないと、自分自身でキメてかかるからだ。その妄念が自分を苦しめてゐることに気が付かないで、来る日も／＼不愉快な日を送り、自ら一層自分の生活の行きつまりを早めてゐるのも、同じバカなことを繰り返してゐるのだ。

二八 腹は先づ無一物から

(40)

二宮尊徳は、さすがに實際家だけあつて、いふことが一々私たちの生活事實に觸れてゐる。またあるとき、かういふことをも言つてゐる。

川久保民次郎といふのは、尊徳の親戚にあたる男だが、この男が曾つて尊徳の厄介になつてゐたことがある。この川久保が尊徳の許を辭して、故郷へ歸らうとしたとき、尊徳は特別に川久保に向つていふには、

「おい川久保、お前もイヨ／＼國へ歸ることになつたけれども、これだけのことは、かならずとも忘れろなヨ。

(41)

マアお前、考へて見るがよい。お前ばかりぢやない誰でも一生に一度くらゐは、食ふに困るときがある。そのとき、タトヒ顔見知りの家でも、腹が空りましたから、一飯御馳走して下さい、庭でも掃きませうからといつたところで、決して振舞つて呉れる者はあるまいが、ところが、それとは同じことではあるが、先づハラが空つたのをガマンして庭を掃けば、あるひは一飯にありつくことが出来るかも知れない。

これは一つの譬へ話だけでも、これこそ自分の見榮を捨てて、人に随ふ道であつて、百事行はれがたいときに立ちいたつても、かならず誰にでも打開することの出来る道である。よく忘れるなヨ。」と教へてゐる。

二九 カネが欲しかつたらマツ働いて見せる

腹が空つた、飯が食ひたい。——これは誰でも同じやうに感じる人間の慾望である。月給が人よりヨケイに欲しい。人からよく思はれたい。出世がしたい。みな同じやうな慾望である。併し世間の人も自分と同じやうに誰でもさう思つてゐるのであるから、ナカ／＼この慾望は違せられない。そこで不平が起きる。不満が起る。それが昂じると、つまりは生活が行きつまつてしまふ。それでは出世どころか、最小限度の生活さへ、いとなむことは出来ない。

そこで、尊徳はそれではイケナイといつてゐるのだ。まづ空腹をコラへて庭を掃け、さうすればヒヨツとすると一飯にありつくことが出来るかも知れない。一方考へると、まことに心細

いやうだけでも、それが人生の眞理だから仕方がない。

生活が行きつまるといふのは、一面からいふならば、誰でも彼でも皆同じやうなことを、メアテに争ひ合つてゐるからだともいふことが出来る。

月給取りは皆月給をメアテにして争ふ。そこには何人かの落伍者が、かならず出なければならぬ筈である。

下駄屋は皆下駄屋のマネをする。魚屋もその通り、百姓もその通り、そこに生活の行きつまりが必ず来る。

そこで、月給取りの中でも削巧な人は、これではイケない。オレだけは他の同僚の氣の付かないことをしなければならぬと氣が付く。削巧な下駄屋もサウだ。魚屋も、百姓も。

同じやうなことをしてゐたのでは飯が食へない。ソコに氣が付いたものは、この激しい生存競争場裡にあつて、かならず何等かの勝を制してゐることは、私がココに改めていふまでもないことであらう。

三〇 コウして腹を作るべきだ

尊徳は引きつづいて、次ぎのやうにいつてゐる。

「わしがまだ若い頃、始めて家を持つたときの話だ、タツタ一枚しかない鋏が破損してしまつたことがある。隣家へ行つて鋏の借用を申し込んだら、折悪しく、鋏を使つてゐる最中で親爺さんがいふには、今この畑を耕して、粟種を蒔いてしまつたら貸してあげようとのことであつた。ソコでワシは家へ歸つても鋏がなくては、することがなかつたので、ちや、その間にワシが耕して進ませう序にその粟種も蒔いて進ませうといふと、親爺さんはタイヘンよろこんで、それは有りがたいこれから後、鋏といはず、鋤といはず、ナンでも不自由することがあつたら遠慮なく借りに来るがよい、と親切にいつて呉れた。これが何よりの生き證據だ、川久保！お前も國へ歸つて、新しく家を持つと、キツトかういふ苦しい羽目にブツつかることがあるに相違ない。その時はワシの言葉を思ひ出してその通りに實行しろヨ。」と諭してゐる。

(44)

三一 ドシ／＼生活を切り下げる度胸が大切

また、あるとき、尊徳はコンナこともいつてゐる。「田があつても草を刈る鎌がなかつたらば日傭取りでもナンでもして、鎌を買ふ金を稼ぎ出せ」と。その通りだ。

ココでイケナイと悟つたら、その瞬間、間髪を入れずに次ぎの場所へ、次ぎの場所でイケなかつたら、その次ぎの場所へ。——ツマリ八十圓で生活が成り立つてゆかないと知つたら、マゴ／＼せずに直ちに五十圓に、五十圓で成り立つて行かないとわかつたら、直ちに三十圓に切り下げて行く、この迷はないで、ドシ／＼生活を切り下げて行き得る度胸のことをハラといふのである。ツマラヌ體面を維持したいといふ迷ひを、一刀兩斷、ズバリと切り捨てる、それがサトリである。男らしいアキラメである。その出来る人は、腹の出来た人なのである。

(45)

三三 眞劍に生きる

眞劍に生きる人を世間ではキツト捨てては置かない。私の友人はその後リツバに職を得たのである。その日から自分たちのアタラシイ生活が始まるといふので、神棚の前で、親子六人がたく更生を誓つて、獅子フンジンの勢ひで立ち上つた。

生活はイノチがけた。ウツや冗談ではない。戦争は既にハジマツてゐるのだ。臆病者はミナ落伍してしまふ。ただ眞劍に生活と闘つてゆく者のみが最後の勝利を占める。

人生は一つの戦場である。(をはり)

昭和十年十二月六日印刷
昭和十年十二月十一日發行

版權
所有

人生は戰場なり

定價十錢
(送料二錢)

著者 奥平祥一
發行者 貴田實
東京市神田區旭町十四番地四
印刷者 卜部常次郎
東京市神田區錦町三ノ十二

發行所 現實處
東京市神田區旭町十四番地ノ四
振替東京六二〇〇二番

發賣所 順生堂書店
東京市神田區旭町十四番地ノ四
(現實處營業部)

特約取次店 森田書房 (東京) 啓徳社 (東京)
京阪神特約店 大阪市北區堂島上二丁目二五 (電話北三九一)
振替大阪五〇二九一番 新正堂書店

ナホ大冊ナハ東京鐵道局公認鐵道保養會所屬ノ鐵道各驛ホーム・スタンドニ於テ一手販賣ノ特約品デス

處 1 2 3 4 6 7 8 9 10 11 人

松木千年著	同	松木千年著	松木千年著	同	清水安彦著	同	成木大業著	故安田善次郎翁語錄	日本産業能率研究所長 上野陽一著
三井・三菱 住友・各家の家 憲・家訓	店員 訓 二百八十ヶ條	働かざる者は食ふべからず	安田・住友・三越 松坂屋・大丸・各店の 實業訓	實位の行安 眠法	朝起きのすすめ	焦るな、落ちつけ(肚の据ゑ方)	その逆を行け(頑張る力)	これから先の暮らし方	生活に困らぬ法(故安田善次郎翁語錄)
五四六頁	六四頁	六四頁	六四頁	六四頁	六四頁	五同六頁	四同八頁	四同八頁	五同六頁
送料二錢	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

目書刊既「書叢生人」及び「書叢世處」



週期的不眠に 苦しんだ予の経験

早稻田大學圖書館長 經濟學博士 林 癸未夫先生

此の夏中自宅に引籠つてゐたせいか、神經衰弱にかゝり不眠から来る頭痛や精神的な疲勞で大分健康を害した。それに三日目に一度位週期的な不眠に悩まされる。そこで予が雑誌や新聞の廣告で知つてゐた『はれやか』を飲んで見ると氣持が妙にほつとした氣分になつたので、それ以來不眠に悩んだ翌日や少し勉強が過ぎた時に之を飲むことにしてゐたが、今迄の様な疲勞も覺えず心身が爽快になつて頭痛などを覺えなくなつた。それ以來私の様な状態にある學究や學生諸君には極力この一服を奨めてゐる次第です。

因みに主効は頭痛・齒痛・不眠症・神經衰弱・ヒステリー・疲勞恢復・めまひ・二日酔・船車暈・胃腸に基づく頭痛。薬價は三十錢・五十錢・一円・二円・三円・五円各地藥店にあり。試供藥文獻御入用の方は東京銀座一ノ五日獨醫化學研究所宛御申込みになれば無代送呈致します。

頭の 栄養劑 は 加やれは

355
1201

逝去八十年 紀念出版 奧平祥一 著 (四六版四百頁・箱入美本・著者自裝)
定價一圓六十錢・送料十四錢

續百姓尊德

る。殊に本書に於いては下總の成田山不動尊に断食參籠をなさざるを得
田原藩の法置の命に接して餘すところがない。尊徳は冷い野の石の上に見え、蒼茫と
たる彼の姿を描き盡して餘すところがない。尊徳は冷い野の石の上に見え、蒼茫と
「あゝ、わしも疲れた」と歎いて山嶺として輝かす波の靈か？ 常しくも天の
州の野の彼方には残んの空に儼然として輝かす波の靈か？ 常しくも天の
には日光連峯が紫紺の空に儼然として輝かす波の靈か？ 常しくも天の
あかとは燃え初めが血と涙とを以てか。綴つた人生は絶望で、
だ。慰めと勵ましとを得たい人は本書を讀め！ 信仰の書だ。常しくも天の
新しく書き改められた人生讀本

百姓尊德 (五版) (四六版三百五十頁・著者自裝)
定價一圓五十錢・送料十四錢

一六八四二東京管振 社秋春 橋本日・京東 所行設
番四二六二橋本日話電 五ノ二橋服吳

終

人生叢書 (2)

行發處實現